

さがに 生きている

VOL.151

NPO法人 森林をつくろう 理事長
佐藤 和歌子さん

●1979年神埼市青振町生まれ。平成17年2月、生まれ育った青振から山や木の情報を発信していることとNPO法人「森林をつくろう」を発足。植林活動や木造住宅の設計「コンベ」など、さまざまな活動を実施。神埼市青振町在住。

ふるさとでの森林を守り育て、活用する大切さを伝えたい

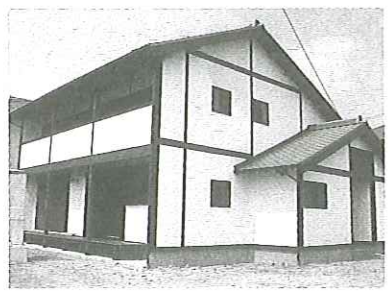
山や木の正しい知識と理解を
広めたい

「NPO法人 森林をつくろう」を立ち上げたのは、多くの人たちに山や木の正しい知識と理解を広めたいと思ったからです。近年、環境問題とともに森林の荒廃が取り上げられ、山主の高齢化や後継者不足、国産木材の価格低迷など苦しくて暗い話題ばかりです。でも、本当の山は、おいしい空気や水を提供する場であり、明るくて癒される場所です。そういった魅力的な部分や、日本で生まれ育った木の良さを情報発信することで、山の大切さを伝えていきたいし、山に携わる人たちが意欲的に仕事ができる環境づくりを整えていきたいと思っています。

もう一つのきっかけは、素材業を営む父の存在です。素材業とは木を育てる林業とは違って、山の所有者から原木を購入して伐採・搬出し、市場などに納入した後、後世のために植林をするという仕事です。山の調査に出掛けることも多く、小さい頃は家族旅行だと言われては、熊本や福岡



佐藤和歌子さん



設計コンベの作品をモデルに建てた住宅



国産木材100%の伝統構法による家づくり

などの山に家族みんなで行っていきます。幼い頃から山に親しんでいたこ

とも、今の仕事につながっているといえますが、実は、弁護士を目指してい

て大学在学中から勉強を続けていました。しかし、その道は厳しく、司法試験に失敗したとき、父から「今、山は苦しい状況にある。私たちがこれまで生活できたのは、何十年もかけて育てた木をわけてくれた山主のおかげ。山主のために、お前なりにできることはないか」と言われました。

受験に失敗して先が見えず、将来を模索していた私は、父の言葉を受けて山へ行きました。すると、自分が悩んでいることが、ものすごくくちっぽけなことを感じたんです。人間は生きていくなかで、いろんな挫折を味わったり、失敗したりすることがあるけれど、それは必ずしも人生の負けではありません。これまで自分が学んできたことや人に教えてもらってきたことを、どう社会に活用していくかが一番大事じゃないかと気がかされました。私自身が山に癒されたからこそ、元氣な山を呼び戻すため、私にできることをしたいと思いました。

山で過ごした楽しい思い出を子どもたちに

山を守る活動 植林を思い浮かべ

もり NPO法人「森林をつくろう」

理事長 佐藤和歌子

〒842-0202 佐賀県神埼市脊振町鹿路585-1

Tel.0952-59-2018 / Fax.0952-59-2748

URL <http://www.mori-tukurou.com>

る人も多いと思いますが、私たちは植林活動だけを目的とした法人ではありません。たとえば、都会の人が山へ遊びに行くことや、国産木材を活用して家を建てることも山を守ることにつながります。なにより、なぜ山が荒廃してしまったのかという問題意識を持って、山を元気にするために自分たちに何ができるかを一緒に考えてほしい。植林活動は、そのためのきっかけづくりで、山での楽しい体験や交流を通して、山を守りたいという気持ちを持ってもらいたいので、みかん狩りやったり、椅子やテーブルづくりを体験してもらおうなど、いろんなことを織り交ぜながらやっています。

・学校単位での環境教育活動も行っていて、福岡の小学校や地元の中学校の生徒たちと植林をしたり、山で拾ったドングリを芽が出るまで家で育ててもらって、それを山に植える活動もしています。また、毎年夏には林間学校を開催しています。対象は、小学生から中学2年生までで、脊振にある旧分校を活用した宿泊施設に泊りして、山登りや川遊びをしながら自然の大切さを体感してもらいます。楽しかったからと、友達を誘って次の年も参加する子どもも多く、30名の定員がオーバーするほど毎年好評です。

木造の家づくりで木の温もりを実感

日本で育った国産木材の良さや、昔ながらの木造住宅の機能性を知って



林間学校で登山をしている様子



親子で植樹



植林イベント(モミジや桜、桜などを植林)



植林イベントに参加された方々



森林についての説明「日本の山はどんなものか」

もらおうと、建築を学ぶ大学生を対象にした木造の家設計コンペも毎年行っています。参加条件は、釘や金具などを一切使わない伝統構法の設計であること。

また、このコンペは、設計を募集して審査するだけでなく、実際に施主を募集して家を建てます。もちろん、施主の希望を取り入れるので、設計どおりとはいきませんが、施主と設計者、建築者が交流しながら、よりよい家づくりを進めていきます。こだわっているのは、大黒柱だけは家族みんなで山まで来ていただき、自分たちが一番いいと思った木を、自分たちの手で伐採してもらおうこと。家族の共同作業で切った木には、絶対に愛着をもってもらえるし、みんなで家づくりを楽しめたという思い出にもなります。コンペは今年で5回目、受賞作品のコンセプトを生かした木造住宅はすでに2棟建っています。

木造の家設計コンペは、若い世代の設計者や建築者を育てる絶好の機会であり、実際に家を建てることで国産木材が活用され、林業の活性化にもつながります。もちろん家を建てるだけでなく、暮らしの中で国産材木を使った机やテーブルを使うのも同じことです。日本で育った木が持つ温もりや優しさ、その木を育む山の素晴らしさを伝えながら、山や木を守り、育て、活用する循環を作る活動をこれからも続けていきます。

(インタビュー: 田中/文責・福地)